様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２９ 日現在

機関番号：５１５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３８１２２９

研究課題名（和文）Examining the Effectiveness of Phonetic Negotiation of Form in L2 Pronunciation Pedagogy for Practical Communicative Competence

研究課題名（英文）Examining the Effectiveness of Phonetic Negotiation of Form in L2 Pronunciation Pedagogy for Practical Communicative Competence

研究代表者
阿部　秀樹（ABE, Hideki）

鶴岡工業高等専門学校・その他部局等・准教授

研究者番号：２０３００５２７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、近年文法指導の分野で着実に指導効果を上げてきたフォーカス・オン・フォームに基づく指導を、音声習得の分野に応用したものである。併せて、Phonetic negotiation of form と名付けたフィードバックが、いかに発音能力の伸長に貢献するか検証を試みた。様々な制限があるものの、発音指導におけるフォーカス・オン・フォームの可能性を支持する研究である。

研究成果の概要（英文）：The research project attempts to investigate the effects of Form-Focused Instruction (FFI) on a foreign language (FL) pronunciation of basic learners of English as a Foreign Language. It also deliberately explores the significant possibility that learners will be able to work together towards eliminating their pronunciation errors in the classroom in order to enable learners to learn FL pronunciation individually and/ or collaboratively with classmates, which makes this project unique in the last few years' development of form-focused pronunciation instruction.

研究分野：英語音声学、英語教育学

キーワード：Form-Focused Instruction　Focus on Form (FonF)　Focus on Forms (FonFs)　Pronunciation　Second Language (L2)　Weak Forms

１．研究開始当初の背景

本研究は第二言語習得研究におけるフォーカス・オン・フォームに基づいた「フォーカス・オン・フォーム・アプローチ」（高島, 2011）による指導効果研究であり、同アプローチが外国語としての英語の発音習得に与える影響を調査した。

フォーカス・オン・フォーム(focus on form, FonF)とは､意味を重視した活動の中で適宜言語形式にも注意を喚起し、言語形式と意味・機能を同時に処理する機会を授業の中でより多く創出することにより、正確さと流暢さの両方の習得を促すことである(Doughty & Williams, 1998)。外国語教授法の歴史の中で、近年極めて注目されているアプローチであるが、文法や語彙等の指導効果研究に比べ発音に関する研究は非常に少ないのが現状であり、コミュニケーション主体の授業の中で上記の定義に基づいたFonFの発音指導に関する研究報告は、Sicola (2008) 以外ほとんどなかった。

このような研究背景に鑑み、FonFが外国語としての英語発音の習得に効果があるのか、あるとすればどのような効果を与えるのか、そしてそれはなぜなのかを教室第二言語習得研究の理論に基づいて調査することは、学習者のコミュニケーション能力の向上だけでなく、アプローチとしてのFonFを深化させる上で重要な意味があると考えられた。

次なる主要な問題は指導のターゲットとなる発音を何にするかであった。本研究の構想当時、欧米の主要なジャーナルや国際学会では、Jenkins (2000)提唱のLFC (Lingua Franca Core)において弱形はコミュニケーション上意思疎通に問題はないことから指導項目として重要ではないとされたことから、大きな反響と議論が展開されていた。さらに、初級学習者を実験参加者とした研究報告には、特に発音(production)面で成功したものがなく、その原因について当時はほとんど調査されていなかった。

２．研究の目的

上記の背景をもとに、本研究では、FonFの効果を学習者の聴解 (perception) 能力及び発音 (production) 能力の発達の観点から調査することをねらいとした。研究課題は以下の通りである：

(1) 指導者による明示的説明やフィードバックを伴う FonF アプローチは学習者の発音能力を向上させるか。

(2) 上記アプローチは英語の弱形の聴取能力と発音能力に指導の前後で違いが見られるか。

(3) 英語弱形の指導は、初級レベルの学習者（ヨーロッパ言語共通参照枠 : CEFR における A レベル)に適切か。

３．研究の方法

FonF アプローチが学習者の発音習得に与える効果を検証するため、独自の聴取(perception)・発音(production)テストを用いて事前・事後テストを実施した（研究方法の詳細は Abe (2015) 参照）。

本調査への参加者は筆者が当時授業を持っていた同学年の 2 クラス 80 名（データ分析は欠席者を除く 61 名：実験群 EG 30 名、統制群 CG 30 名）である。全員初級レベルの学習者であった。

参加者は先ず perception 能力(以下 PC)と production 能力(以下 PD)を測定するため、音識別とディクテ―ションからなる PC 事前テストと短文のリーディング、絵の描写による PD 事前テストによって英語の弱形能力を測定した。

実験指導は通常の授業時間内に行われた。EG と CG への指導処置で共通したことは、PC の段階では教科書のパッセージで弱形が使用されている語句をブランクにし、音に集中して聴取できるよう指導し、聴取が的確か確認し明示的な説明を与え理解を助けた。

EG と CG の指導処置で異なるのは PD の段階である。CG は聴取したものを読む、所謂音読練習によって個人あるいはペアで弱形の練習をしたのに対し、EG では音読は確認程度にし、写真や絵の描写をペアやグループで発表し合うといった弱形の実際面での使用を促した。その際、誤りがあればフィードバックも行った。発音の誤りを修正するフィードバックであり、Abe (2015)では、Phonetic Negotiation of Form と名付け下記のようなフィードバックを処置した。

Student: *I'm good* [a]*t playing baseball*.

Teacher: *Good* [a]*t? Now, listen. Yours, good* [a]*t. Normally, good* [ə]*t. Can you see the difference?*

Student : *I'm good* [ə] *t playing baseball.*

このような指導処置の後、事前テストと同様に､音識別とディクテ―ションからなる PC 事後テストと短文のリーディング、絵の描写

による PD 事後テストによって指導効果を事前テストとは別問題で測定した。

４．研究成果

検証授業の結果から、下記のような結果が得られた。先ず、研究課題１に関して表１、図１、２において記述統計及び有意差検定を示す。多重比較の問題を避けるため、Bonferooni 法による調整を行い有意水準を p<.017 とした。PC、PD 各テストの満点は３０点であるので合計は６０点となる。

表 1　弱形発音に関する聴解と発音の事前・事後テストの記述統計及び有意差検定

		EG (n=30) 平均±SD	CG (n=31) 平均±SD	有意差検定
事前	PC	11.57 ±1.92	11.55 ±2.20	0.97
テスト	PD	13.27±3.19	13.26±4.27	0.99
	合計	24.84±4.04	24.81±4.72	0.98
事後	PC	16.20±2.82	14.52±2.66	0.02
テスト	PD	13.3±1.47	11.97±1.64	0.0014
	合計	29.5±3.42	26.48±3.12	<0.001

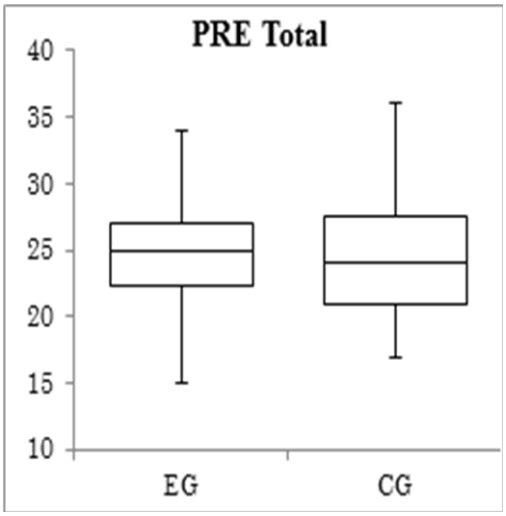

図 1 実験群(EG) と 統制群(CG)の事前テストにおける分布

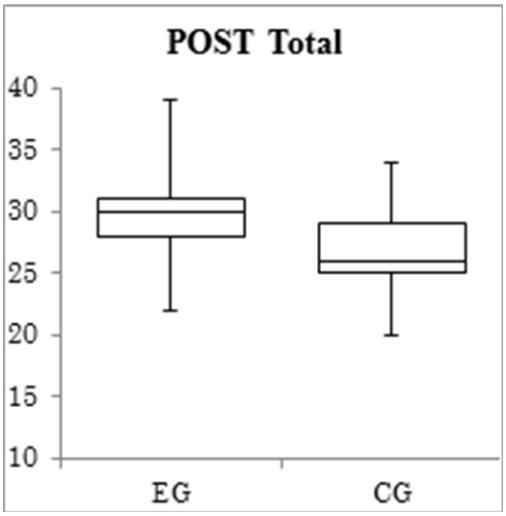

図 2 実験群(EG) と 統制群(CG)の事後テストにおける分布

事前テストにおいて、EG と CG にまったく差はないが、事後テストにおいて PC 及び PD 両方の総合点（合計）で EG が CG を有意な差を伴って高得点をあげただけでなく、効果量も大きい（ただし事後テストの PC は有意水準 0.17 に達してはいないが限りなく近づいている点を評価したい）。ただし、PD については中程度であった : 総合点、*Cohen's d*=1.00; PC、*d*=0.94 ; PD、*d*=0.62。このことより、FoF アプローチによる指導は、短期効果ながら、音読のみの伝統的な教授法より効果があると言える。両グループの得点差を Wald 検定で分析した（表 2 参照）。 総合能力及び PC における有意差とは対照的に、PD に有意差がない。この問題を次の研究課題で検証する。

表 2 聞き取りと発音に関する Wald 検定の結果

	Coefficient			
	Estimate	95% CI		
		Lower	Upper	
				p-value
PC	1.67	0.041	3.290	0.05
PD	1.32	-0.367	3.014	0.18
合計	2.99	0.971	5.007	0.0052

研究課題２は、PC と PD の発達を検証したが、Wilcoxon 検定の結果と効果量(*r*)を表３に示す。総合能力及び PC において、FonF アプローチはある程度の指導効果はあったと言える。しかしながら、本研究の構想当時の先行研究同様 PD に顕著な違いはなく、音響測定でも有意な差はなかった（Abe , 2015 参照）。

表 3　実験群と統制群の発達に関する Wilcoxon 検定

		平均と SD	有意差検定	*r*
PC	EG	4.63 ±3.43	p< 0.001	0.81
	CG	2.97 ±3.04	p< 0.001	0.71
PD	EG	0.03 ±2.43	0.935	0.02
	CG	1.29 ±4.08	0.20	0.31
Total	EG	4.67 ±4.25	p< 0.001	0.75
	CG	1.68 ±3.79	0.02597	0.41

最後に、上記の議論に基づいて研究課題３について考察する。確かに、FonF アプローチを伝統的な教授法と比較すると有意差と効果量共に、短期間ながら指導効果があったと言える。ところが、発達という観点からすると英語の弱形は初級者には難易度が高い発音であり、実際の指導ではこの点や、学習者の個人差にも配慮した指導が求められる。

引用文献

Abe, H. (2015). *Effects of form-focused instruction on the acquisition of weak forms by Japanese EFL learners.* Unpublished Ph.D. Thesis. Nagoya Gakuin University Graduate School.

Doughty, C. & Williams, J. (Eds.). *Focus on form in classroom second language acquisition* (pp. 15- 41). Cambridge: CUP.

Jenkins, J. (2000). *The phonology of English as an international language*. Oxford: OUP.

Sicola, L. (2008). *No, they won't 'just sound like each other': NNS-NNS negotiated interaction and attention to phonological form on targeted L2 pronunciation tasks*. Frankfurt am Main: Peter Lang.

高島英幸（2011）.　『英文法導入のための「フォーカス・オン・フォーム」アプローチ』 東京：大修館.

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　３件）

①Abe, H. (2016). The role of form-focused instruction and individual differences in the development of foreign language pronunciation. *Transactions of ISATE 2016: The 10th International Symposium on Advances in Technology Education*, 230-233. Sendai: NIT Sendai College. [Refereed]

② Abe, H. (2015). Helping engineering- major learners learn foreign language pronunciation in the classroom. *Transactions of ISATE 2015: The 9th International Symposium on Advances in Technology Education*, 285-290. Nagaoka: NIT Nagaoka College. [Refereed]

③ Abe, H. (2014). The Effects of input-based and output-promoting practice on L2 pronunciation development in the foreign language classroom. *Proceedings of the European Conference on Language Learning 2013, 528-538.* Brighton, UK: IAFOR. [Refereed]

〔学会発表〕（計　４件）

①Abe, H. (2016, 9 月). The optimal conditions forform-focused instruction in eliminating second language pronunciation in the classroom. *Second Language Research Forum*Tokyo: Chuo University. [Refereed]

② Abe, H. (2015, 5 月). The acquisition of vowel reduction by Japanese EFL learners in form- focused instruction. *The 4th International Conference on English Pronunciation: Issues & Practices* (EPIP4). Prague: Charles University in Prague. [Refereed]

③Abe, H. (2014, 8 月). Examining phonetic negotiation of form as corrective feedback in form-focused instruction and L2 pronunciation pedagogy. *The 17th World Congress of Applied Linguistics* (AILA). Brisbane, Australia: University of Queensland. [Refereed].

④Abe, H. (2013, 10 月). Effects of phonetic negotiation of form on the acquisition of weak forms in L2 phonetics pedagogy. Topics in Applied Linguistics 2013, Opole University, Poland. [Refereed]

〔学位論文〕（計　１件）

Abe, H. (2015). *Effects of form-focused instruction on the acquisition of weak forms by Japanese EFL learners.* Submitted to Nagoya Gakuin University Graduate School. Doi: 10.15012/00000613.

６．研究組織

(1) 研究代表者

阿部 秀樹　（ABE, Hideki）
鶴岡工業高等専門学校・創造工学科（基盤教育グループ）・准教授
研究者番号：20300527

(2) 研究分担者　なし

(3) 連携研究者　なし